

令和6年3月11日
府中市立小柳小学校
校長 内井 利樹

令和5年度 学校経営報告

1 今年度の取組と自己評価

(1) 目指す学校像について

「笑顔あふれるみんなの学校」を目指して、「褒めて認めて価値付ける」ことを大きな柱として教育活動を行った。教師には児童のよさや伸びを見取り、具体的に評価することを意識させた。様々な場面、方法で評価することを通して一人一人の自己肯定感や自己有用感を高め、学ぶことや活動することに喜びを感じられるようにした。

学校評価の児童アンケートでは、「自分にはよいところがある。」と「先生はよいところを認めてくれる。」という項目について、前者は91%、後者は88%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比でそれぞれ-2ポイント減少している。保護者アンケートでは、「教師は一人一人の児童のよさを認め、伸ばそうとしている。」という項目について、94%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前期比（前年度は同項目が無かった）で+2ポイント増加している。また、教員の自己評価では「子供を褒めたり認めたり価値付けたりする中で、自己肯定感や自己有用感を高めることができた。」という問いに対し、100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。子供が受けている印象とは10ポイントほど差がある。子供たちが自分のよさや頑張りを自認できるように、教師の明確な働きかけや評価を行う必要があると考える。

(2) 重点目標への取組と自己評価

① かしこい子の育成

主体的・対話的で深い学びを具現化するために、一人一人が自分の考えをもち、意見を交流しながら学びを深められるような授業づくりに取り組んだ。

- 週ごとの指導計画に毎時間のねらいを明確に示させ、その時間に知識・技能を確実に習得できるようにさせた。
- 特に単元やその時間の導入の工夫に力を入れて教材研究をするように促した。
- 校内研究会では様々な講師の先生を招聘し、対話的に学び合う子供の育成を目指した授業研究に取り組んだ。

学校評価の児童アンケートでは、「授業で学んだことは理解できている。」「分からなかった問題について、間違い直しをして分かってもらうなど、粘り強く取り組んでいる。」という項目について、前者は93%、後者は90%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比でそれぞれ+2ポイント、+0.5ポイント増加している。また、「友達との学び合いの中で、考えが広がったり深まったりしている。」という項目について、92%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前期比（前年度は同項目が無かった）で+1ポイント増加している。保護者アンケートでは、「教師は基礎学力の定着を図るために努力している。」「小柳小の子は、学び合いを通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。」という項目について、前者は95%、後者は94%があてはまる、だいたいあてはまると答

えている。これは前年度比（学び合いについては前期比）でそれぞれ+8ポイント、+1ポイント増加している。また、教員の自己評価では、「各教科等で基礎・基本の徹底が図られたか。」

「児童主体の授業スタイルになるように意識して授業を設計・実施しているか。」「子供同士学び合う学習が実施できているか。」という項目について、いずれも100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。しかし、あてはまると答えた教員の割合については、学び合いについては57%に対して、基礎・基本の徹底は21%、児童主体の授業スタイルについては36%にとどまっている。このことから、かしこい子の育成について、ある一定の成果は上がっているものの、特に主体性についてはより意識して伸ばしていけるような授業改善が課題と言える。

② やさしい子の育成

自分も相手も大切にするために、人権尊重の精神を基盤とした指導に取り組んだ。

- 子供の話を傾聴し、子供の気持ちに寄り添った指導ができるようにさせた。
- 学年会や夕会の時間に子供の様子を共有し、いじめや不登校の未然防止、早期発見、早期対応に努めた。

学校評価の児童アンケートでは、「いじめや仲間はずれがなく、友達と仲良く生活している。」という項目について、92%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で-1ポイント減少している。保護者アンケートでは、「学校はいじめや不登校をなくし、児童が温かい人間関係を築いていけるように努力している。」という項目について、91%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で+12ポイント増加している。また、教員の自己評価では、「いじめ問題の対応について共通理解し、迅速に組織的に対応しているか。」という項目について、100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。しかし、あてはまると答えた教員の割合については4%しかなく、不登校の未然防止も含めてさらに課題意識を高めて子供の話を傾聴したり様子を見たりして、迅速かつ丁寧な対応を意識する必要がある。

③ 元気な子の育成

多様な運動や遊びを通して体を動かす喜びを感じさせるとともに、自分の心と体を自己調整できるようにすることに重点を置いた指導に取り組んだ。

- 体育学習に加えてなわとび旬間や持久走旬間、大谷選手week等、特別な活動を位置付けて、運動習慣の定着や運動への興味・関心を高めるようにした。
- 体育学習を含めた振り返りの時間に、自分の心と身体の調子を見つめさせる指導を徹底した。

学校評価の児童アンケートでは、「運動することが楽しい。」という項目について、93%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で同じ数値である。保護者アンケートでは、「教師は体力の向上を図るとともに『体を動かすことが好きな児童』の育成に取り組んでいる。」という項目について、91%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で+7ポイント増加している。また、教員の自己評価では、「学力・体力の向上を目指し、指導・評価の改善がなされたか。」という項目について、100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。しかし、あてはまると答えた教員の割合については11%しかなく、自己調整についても含め、指導の改善が課題と言える。

④ 地域・保護者との信頼関係の構築

創立50周年を良い機会と捉えて、地域や保護者との情報交換を密にし、双方向の連携を図った。また、安全安心な学校づくりを目指し、交通事故や不審者対策、感染症や熱中症対策、校舎内外の安全等々について、情報交換や意見交換を行った。

- 子供たちを地域やPTAの行事に積極的に参加させ、地域の一員である意識を高めるようにした。
- 六中学区、九中学区の学校と連携をとり、共通理解の基で子供を育てるようにした。
- 地域の人材を活用したり地域の環境を生かしたりしたカリキュラムを進めた。
- 換気扇の修理や熱中症指数計の設置場所を増やすなどの対策を進めた。

スクール・コミュニティ協議会からは、子供たちの挨拶のよさや教員の地域行事への参加協力のよさについて、評価していただいた。また、タブレット端末の活用については推進するとともに読んだり書いたりする学習との併用についてのご意見をいただいた。

⑤ 働き方改革の推進

古い慣例にとらわれず、不易と流行を吟味して、新しい学校の在り方を模索した。

- 学校行事、諸会議、校内組織等の見直しを進めた。
- 学校経営支援事業や副校長等校務改善事業を有効活用し、校内事務の軽減と効率化を図った。

教員の自己評価では、「教育活動の精選や効率化を図る方法を模索しているか、または図ることができたか。」「職員会議、三部会、三委員会等の会議は、適切に計画・準備され、円滑に校務を行うことができたか。」という項目について、それぞれ100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。しかし、あてはまると答えた教員の割合についてはどちらも11%しかなく、更なる改善が必要である。

⑥ 全ての教育活動の基となる、教師力の向上

授業改善を軸に様々な研修を行い、教師力の向上を目指した。

- 学年会で先週の授業を振り返らせ、よかった指導を共有させることで学年内のOJTを進めた。
- 観察授業では各自が1学期につき15分×3回の授業参観を行い、お互いの授業のよいところを参考にできるようにさせた。
- 職員会議や職員夕会、校内研究会などで授業づくりや評価、服務事故防止などについての研修を行った。

教員の自己評価では、「OJTの推進が効果的に図られていたか。」という項目について、100%の教員があてはまる、だいたいあてはまると答えている。しかし、あてはまると答えた教員の割合については11%しかなく、OJTで学んだことを普段の指導に生かすことができるための工夫や時間の見出し方に改善が必要である。

2 次年度以降の課題と対応策

(1) 自分も相手も大切に、共につながる子育てを育てること

自分のよさや相手のよさを認識し、共に学び行動することに喜びを感じられるようにすることは最大の課題であると考え。そのために以下のことを徹底する。

- 人権尊重の精神を大切にし、学校の教育活動全体を通して多様性を認め、自己を振り返り、よりよい自己の実現を目指したり他者を尊重したりできるようにする。
- いじめや不登校、問題行動等について未然防止に努めるとともに、発生した際には関係諸機関と連携し、迅速かつ丁寧な対応を進め、早期発見、早期対応に努める。
- 特別支援学級の子供と通常学級の子供の交流および共同学習を推進し、お互いを思いやる心を育てる。
- 支援員を有効に活用し、不登校傾向の子供や特別に支援が必要な子供への支援をさらに充実させる。

(2) 自ら学び、共に考えを高めることができる子を育てること

主体的・対話的で深い学びを実現するために、教科担任制の研究と実践を通して、問題解決的な授業づくりに取り組んでいく。そのために以下のことを徹底する。

- 発達段階に応じて子供たちが学習計画を立て、主体的に問題を解決することができる学習スタイルを確立し、一人一人が学ぶ意義を実感できるようにするとともに、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。
- タブレット端末を適切に活用し、子供に学びを委ねながら個別最適な学びを目指すと共に、ペアや小グループでの学び合い活動を重視した協働的な学びを充実させる。
- 知識・技能の習得と共に、それらを活用する喜び、課題に挑戦する楽しさを実感させる。

(3) 心身の変化に気付き、粘り強く頑張る子を育てること

体を動かすことに喜びを感じ、心身の健康を目指して努力できるよう支援する。そのために以下のことを徹底する。

- 運動の日常化を進め、全校及び各学級ですすんで体を鍛えるような場と機会の拡充を図り、健康な心と体づくりを推進する。
- 心と体の調子や動きを振り返る機会を適宜設定し、次の行動の見通しをもったり見直したりして、気持ちや体をコントロールしようとする素地を育成する。
- 近隣のプロスポーツチームを招聘し、学習を行ったり話を伺ったりする機会を設け、体を動かすことへの関心を高める。

(4) 地域・保護者との連携を進めること

地域・保護者との双方向の連携を深め、地域の中で子供を育てるようにする。そのために以下のことを徹底する。

- 全学年で地域学習を進める。特に3～6学年の総合的な学習の時間においては、夏季休業中にも地域の施設や環境、人材を生かした学習に取り組む。
- 地域・保護者から寄せられたアンケート調査の結果を学校の教育活動に反映させる。